

● シリーズ 私の見た日本 Vol.177

建築の意味

Karri Juhani Flinkman (カッリ・ユハニ・フリクマン)



フィンランドのアールト大学の建築部出身。現在、東京大学の「まちづくり研究室」の博士後期課程大学院、同時に「名古屋の天狗」とも呼ばれる。専門は都市計画、まちづくり、社会人類学であり、絵、兵法、武道でもある。

私は師匠の下で武道を極めるため、2013年に初めて来日した。日本語はほとんど話せなかったが、師匠と長い時をともに過ごすうちに心が通じるようになっていった。時にはリビングが散らかるのもお構いなしに、ペン、紙、コップ、箸、写真、本、スケッチなど身の回りのものを駆使して会話をした。行き当たりばったりの連続だった。

来日を何度か繰り返した後、2016年に修士論文を書くため日本に移住した。しばらくして両親が私の顔を見に来日した。父は一度日本に来たことがあったが、母は初めての来日だった。その母がこんな言葉を口にした。「なんて酷いところなの、ここは。」その言葉を聞いて私に何が走った。「ジブリ映画の素晴らしい景色や景観はどこにあるの。日本は「和」の国ではないの。小さな寺院や神社が立ち並んでいる国ではないの。そのうえ、これは何。」母は電車越しに今にも壊れそうな家屋を指さして続けた。父も頷いていた。私は説明しようと試みたものの、逆に忘れかけていた何かに気づかされるような感覚に陥った。

混沌の謎

ヨーロッパのなかでも特にフィンランドでは「全体よりも個」を重んじると考える人がほとんどだろう。さらに言えば、日本は規範ありきの同一主義なのに対して、北欧は個人主義と言えるだろう。しかし、ここで疑問が生じる。世界のなかでも北欧が整然としている都市に含まれるのはなぜか。日本は団体主義が強いのに、なぜ日本の都市は混沌としているのか。

私は国の広さが関係しているのではないかと思いついた。事実、私は人の活動量と面積を題材として修士論文を書き、いたって単純な結論を導いた。人口が多ければ、活動量も多い。そのため建物を建てて壊すサイクルも早く、それが繰り返されることで混沌と

なる。自分の机を思い出すとわかりやすい。使えば使うほど、手に負えない状態になるのではないか。しかし、都市の混沌を面積だけで語れるのだろうか。都市が発展する過程で誰しもが自然と空間をいかに効率的に使うかを考えるはずだ。

実際、研究者らは長年、ありとあらゆる視点でこの理由を追求している。ある者は風土から、ある者は景気に左右される社会や経済から、哲学や宗教も忘れてはいけない。一口に列挙しきれないのだが、なかでも、バリー・シェルトン (Barrie Shelton) による文字を切り口とした考え方が私のお気に入りだ。よく目を凝らして見れば、日本はとこころごころ混沌で複雑だと感じるだろう。

物語の形

皆さんはかの有名なカート・ヴォネガット (Kurt Vonnegut) をご存知だろうか。「スロウターハウス5 (Slaughterhouse5)」の著者だ。「物語の形 (the Shape of Stories)」という彼の講義について少し語りたい。「物語は形をもっている」とし、物語の構造を図式化している。この図には登場人物の幸、不幸の軸と、物語の「始まり」から「エントロピー」までの展開の軸がある。

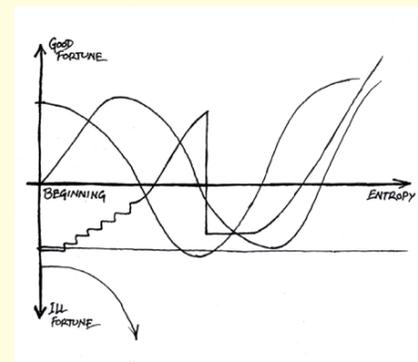
彼の講義の要点についてはあえてここでは触れないが、図の下のほうでエントロピーまで延びている、終始「不幸」の1本線について触れておきたい。ほかの感情曲線 (物語) と比べて、この線は明らかに何が違う。数学の授業でこんな直線のグラフを書いたのだろうか、もしそうだとすると、面白みに欠ける。この直線が表す物語は、特に何も起きることもなく、さぞかしつまらないものだろうと誰しもが思うかもしれないが、実は違う。この題材はハムレットなのだ。ぜひ、この講義を検索してほしい。

建築という物語

私が大学で建築を専攻していた際、建築は物語である、語るように考えるのだと教えられ、在学中その意味を理解することはなかった。簡単に言うと「意味不明」だった。芸術には物語があると言われるが、親近感が湧く登場人物がいて初めて物語になるのだと思う。現に私が芸術のなかで絵、コミック、アニメーション、そして文学に惹かれるのはそのためだと思う。さらに、専門家である建築家さえ、結局、建築は10%の創造力と残りはただの手続きや申請の繰り返しだと口にしていて、そのことをよく覚えている。

徐々に私の興味は建築から遠のいていき、都市計画に向いていった。都市計画は、建築と比べて曖昧な部分が少なく、論理的な意味合いが強いからだ。この変化によって新しい世界、論理、経済、政治、哲学、そしてある意味で人文科学のありとあらゆる場面に遭遇することになった。ここで大切なのは、都市計画が私にとって「理解できる」ものだったことである。

ここまでは私が日本に来るまでの話である。しかし、ヨーロッパの都市と比べて、日本の都市は建築と同じように全く理解できないものだった。建築の知識については自信がないが、都市計画については違う。混沌な日



Shape of Stories



日本の混沌 さまざまな物語が重なっている日本の街や都市の風景 汚くても、美しくても、単純でも、複雑でも、単なる良し悪しを超える人間性が素直に現れる

本の都市は、私の想像を超えていた。雑然、見苦しさ、不均一さ、カオス、そしてその否定できない魅力に正直、苛立ちを覚えたほどだ。しかし、学びたい、学ばなければならぬ、いや、前進するためには超えなければならぬ難解だと思ったのだ。

Ta Panta rhei

先日、母校の高校生に建築を学ぶ価値について話す機会があり、その最中に私にとっての建築とは何かが突然鮮明になった。それは建築物にとどまらず、建築が残したものの、人々に与えた影響、その建築が生むあらゆる現象も含む。ヨーロッパの伝統的なアーケードを例に挙げると、早朝にアーケードの天井に霧が生じたり、風のない日にアーケードを通ると風を感じたり、夕暮時にアーケード内が夕日色一色に染まったりする。つまり、私にとって建築とは、そのアーケードより、そのアーケード内の霧、風、色のようなものだ。

その理解がいつどうやって得られたのか全くわからない。しかし、そこにたどり着いたのには「あべこべ」な日本の都市のせい、いや、お陰なのかもしれない。不朽の建築が日常を形成する代わりに、日常は「常」の建築を形成し、それらの物語が積み重なり現実となっていく。

「Ta Panta rhei (万物は流転する)」、これは泣きの哲学者として知られるヘラクレイトスの名言である。川の流れるが月日をかけて自然の風景をつくるように、流転によって環境が形づくられるのであれば、物語はとても簡単に読み取れるものになるだろう。

ここで、ヴォネガットの講義の話に戻る。やっとあの図を紐解く時となったが、私は彼と異なる解釈をしている。私がフィンランドで建築を理解できなかったのには、対比がなかったことが理由として挙げられると思う。言い換えるなら、1本の物語曲線はよくできすぎていて、考える余地もなく物語の展開が読めてしまい、つくり話の印象がぬぐいきれないのだ。しかし、全ての物語を同じ図に落とし込むと、曲線が重なり合って共存し、現実の混沌が見えてくる。図を俯瞰してみると、完全な理解と大混乱のなかに日本の都市が現れる。そう、来日した当初、師匠のリビングが散らかるのもお構いなしに、身の回りのものを駆使して会話をしたあの時のように。

私は先述のような「見方」を手に入れたことで、ほかの世界も同じような物語の集合として見るようになった。私たちの日常のあらゆる側面は日常の永遠の流れに触れており、形をつくり、形づくられる。壮大な展開は素晴らしい物語となるかもしれないが、実際の日常

はそうではない。また、自分の身の回りで起きていることから置き去りにされることもない。それに関わらず、どんな人の人生も素敵な物語となる。なぜならそこには「混沌」があるからだ。これが日本の都市から私が学んだものであり、深く感謝していることだ。そのお陰で今も研究が続けられているのだろう。とはいえ、このひどい日本の街並みをどうにかしてほしいものだ。



Galleria Vittorio Emanuele II, ミラノ、ヨーロッパ (欧米) の伝統的なアーケード